

生きること 遠慮はいらない



● 植木 学
● 作家

病院生活も回復期になると徒然（つれづれ）であるから、ベッドの上で新聞を見ることが楽しみである。普段は目を通さない隅々までよく読んだ。病気は心臓疾患と神経痛である。ベッドにばかり居ると脚が弱って、後で歩けなくなるとは困るから、少しはベッドを離れて廊下を歩く方がよいと言うので、廊下をよちよちと不恰好に歩きながらロビーに出た。ロビーは二階で、一枚硝子の窓際の椅子にかけて見下すと、真下は街路である。車が頻繁に往來している。赤もあれば緑もあり、空色も黄色も、黒も白も、その他思いがけない色さまざまな車が疾走している。ふと先頃亡くなった長男の車は大型の白であった等と思ひ浮べながら、何時の間にか行き交う車の数を目で追っている。凡そ十分間に百台を数えた。我に返って我ながらつまらない遊びごとをしたものだ、ロビーの一隅に据えてあるテレビに目を移すと、丁度臨時行政調査会長の土光敏夫氏の顔が大きく写し出されていた。土光氏は八十六歳であるという。その面構え・体力・気力・頭脳のたしかさには驚く外はない。

い。ところで、土光氏とは対照的な風貌体格をしている松下電気の松下幸之助氏に或る人が言った。「八十八歳だというお歳なのに、全くお元気ですなあ」と。すると松下氏が答えて言うには、「心が若いですからなあ」と、そして続けて言った。「僕の体の骨は非常に若いですからなあ。先頃大阪で講演した時に、百二十歳まで生きると宣言しましたから、今はそれに挑戦しているところですよ」と、更に言った。「人はどんな夢を見ようと自由でしょう。僕は色々なことを考えて、二十一世紀を迎える心の用意をしているのです。その日の仕事はその日の仕事、夢は夢という具合に使い分けてやって行く、そうすると若さが保って老いることを知りませんからねえ」と。

ことはせず、煙草は厳禁、酒には気をつけて、充分に節制さえすれば、後十年、二十年も生きることが出来ますよ」と言う。うれしくなって、ほほう、この後十年も生きることが出来たら、若い時に怠けた分もいくらか取り戻すことが出来て、先頃三十六歳で死んだ長男の心残りの分まで、どれだけか頑張ることが出来るかも知れないなどと、虫のよいことを考えながら、「先生そんなに長生きしたら、段々高齢化して行く世の中に迷惑をかけることになりはしませんか」と言えば、「何んの何んの、生きることには遠慮はいりませぬばい」と言う。それもそうだと、つい苦笑いをしてしまった。

野に戯れ



● 藤間豊太郎
● 日舞教授

踊りの家に生まれ育ちました私は、ごく小さいころ、みんなが生活の中で踊りをおどるものと思っておりました。高校二年で名取となり、母の手助けをして代稽古をつとめるようになりまして、そのころは髪もポニーテールにリボンをつけて、「若いお師匠さん」と呼ばれたりしたものです。私どもの習慣で、古い方は今でも「お師匠さん」と呼んでおりますが、このごろではほとんどもが「先生」になってしまいました。時々、お弟子たちと旅行したりすると、みんなが「先生」と呼ぶので、いったい何の先生なのかと尋ねられることがあります。当てもらうと、「お料理の先生でしょう、それもフランス料理の」と自信ありげに言われたので、もともと私が喰いしんぼうなのをよく知っているみんなは、大笑いしてしまいます。

実をいうと、たまにお料理の先生になりましたかっとなあとと思うことがあります。庭のすみに食べられる野菜や草を丹念に植えて、春になっての摘み草はうれしい年中行事のひとつです。まだ風が肌寒く感じられ、こぶしや鮮芳（すおう）、連翹（れんぎょう）の花の咲き始めるころ、いち早く春の香りを摘み出かれます。そして嫁菜はさつと塩ゆでにして、緑も鮮やかな嫁菜め

し、芹はゆがいてごま正油、つくしははかまをていねいにとり、油でよく炒めてこつてりと仕上げます。野の草は摘んですぐに手早く料理していただくなければ、色も香もだいたいです。四、五月、わらび狩りや筍（たけのこ）掘りの季節がまたうれしい時なのです。もうずいぶん前から恒例になっていて、ご近所に配ってまわるものから、そのころを見計らって、タンサンを買って待っているというおうちもありません。わらびや山うど、落（ふき）、だららの芽、その上帰りの道草にはよもぎをつまんできますので、食卓は春の野の香でいっぱいになります。

して食べた時のほのかな香り、あの感激は一生忘れられません。子供のころ川で泳いでいたら、広々とした西瓜畑が見えてきました。悪童四、五人、ひとつ大きいのをとってやろうと目論み、ジリジリと照りつける西瓜畑を黒んぼどもがつっ走りまわります。いざ取りかかってみると、あの細い蔓（つる）の強いこと、ねじっても引っぱっても手におえません。仕方なく大きいのを諦め、小さいのをやつとの思いでちよん切り、一目散に走って西瓜もろとも川へ飛び込み、川下へ逃げて、どうやらここまで来れば安心という所で、岩の上に西瓜を置いて石で叩き割ると、なんとどうら成りでしかもたぎっているのです。これでは食べられたものではありません。後に、ある人から、西瓜どろぼうは夜明けにするものだとたしなめられました。そのころを境に、私のいたずらもおさまったようです。